

かなわない恋だとわかってた

a film by John H. Lee
SAYONARA ITSUKA

サヨナライツカ

『私の頭の中の消しゴム』イ・ジェハン監督 12年ぶりの主演中山美穂

中山美穂 西島秀俊 石田ゆり子 加藤雅也 マギー

原作：「サヨナライツカ」辻仁成 (幻冬舎文庫) 主題歌：「ALWAYS」中島美嘉 (ソニー・ミュージックアソシエイテッドレコーズ)

CJエンタテインメント提供/制作：スパイロフィルム/2009年韓国/提供：フジテレビジョン、アスミック・エースエンタテインメント、関西テレビ放送、ソニー・ミュージックエンタテインメント 配給：アスミック・エース



CJ ENTERTAINMENT PRESENTS Sponsored by Korea Export Insurance Corporation, Culture Export Insurance A TWO BEAR PICTURES / SPIROFILMS PRODUCTION A FILM BY JOHN H. LEE
MIHO NAKAYAMA HIDETOSHI NISHIJIMA YURIKO ISHIDA "SAYONARA ITSUKA" MASAYA KATO MAGY
EXECUTIVE PRODUCER KATHARINE KIM CO-EXECUTIVE PRODUCERS JOON H. CHOI SEAN LEE PRODUCED BY JAE S. SHIM / YOUNG S. HWANG ASSOCIATE PRODUCER TAKAHIRO KASAGI PRODUCER JONG-YOOK ROH
MUSIC BY JAE-HYUK SEO COSTUME DESIGNER SEONG-IL KIM EDITED BY STEVE M. CHOE PRODUCTION DESIGNER KI-HO CHOI DIRECTOR OF PHOTOGRAPHY CHEON-SEOK SEBASTIAN KIM
SCREENPLAY BY JOHN H. LEE SHINHO LEE & MAN-HEE LEE BASED ON THE NOVEL BY HITONARI TSUJI DIRECTED BY JOHN H. LEE ©2009 CJ Entertainment Inc. All Rights Reserved. sayoitsu.com

1.23 (Sat.) ROADSHOW

一瞬の恋が、一生の愛へとつづく——最高にせつないラブストーリー——

R15+



一瞬の恋が、一生の愛へとつづく。

サヨナライツカ

SAYONARA ITSUKA

『私の頭の中の消しゴム』 × 12年ぶりの主演
イ・ジェハン 監督 中山美穂

CJ ENTERTAINMENT PRESENTS

Sponsored by Korea Export Insurance Corporation: Culture Export Insurance A TWO BEAR PICTURES / SPIROFILMS PRODUCTION A FILM BY JOHN H. LEE

MIHO NAKAYAMA HIDETOSHI NISHIJIMA YURIKO ISHIDA "SAYONARA ITSUKA" MASAYA KATO MAGY

EXECUTIVE PRODUCER KATHARINE KIM CO-EXECUTIVE PRODUCERS JOON H. CHOI / SEAN LEE PRODUCED BY JAE S. SHIM / YOUNG S. HWANG ASSOCIATE PRODUCER TAKAHIRO KASAGI CO-PRODUCER JONG-YOON ROH

MUSIC BY JAE-HYUK SEO COSTUME DESIGNER SEONG-IL KIM EDITED BY STEVE M. CHOE PRODUCTION DESIGNER KI-HO CHO DIRECTOR OF PHOTOGRAPHY CHEON-SEOK 'SEBASTIAN' KIM

SCREENPLAY BY JOHN H. LEE SHINHO LEE & MAN-HEE LEE BASED ON THE NOVEL BY HITONARI TSUJI

DIRECTED BY JOHN H. LEE ©2009 CJ Entertainment Inc. All Rights Reserved.

INTRODUCTION

『私の頭の中の消しゴム』イ・ジェハン監督×12年ぶりの主演・中山美穂
 2010年最初の涙、最高にせつないラブストーリー
 一瞬の恋が、一生の愛へとつづく。

誰にでも、忘れられない恋がある――

一生に一度の燃えるような愛を綴り、多くの男女の心を震わせたベストセラー「サヨナライツカ」その25年にわたる壮大なラブストーリーを、日本でも興収10億円を超える大ヒットを記録した『私の頭の中の消しゴム』のイ・ジェハン監督が待望の映画化。タイ、日本、韓国での1年以上におよぶ撮影を経て完成した美しくせつない究極の恋愛映画「サヨナライツカ」が、遂に日本上陸となる。

「ロイヤルホテルのスイートルームに住む香子は、自由奔放で欲望に忠実な女性。演じるのは、イ・ジェハン監督の熱烈なラブコールを受け、12年ぶりのスクリーン復帰を果たす中山美穂。香子と運命の恋に落ちる豊に西島秀俊、豊の婚約者光子に石田ゆり子。伝えたかった想い、胸の奥にしまっていた秘密、どうしても言わずに逝ったあのこと……それぞれの想いを胸に過ごす歳月を見事なアンサンブルが紡いでいく。

バンコク、東京、ニューヨーク――瞬時の熱情が、25年の時を超え、一生の愛になる。離れていても時がたっても、そこまで人を愛することができるのだろうか。

恋をしたことのあるすべての人が涙する、最高にせつないラブストーリーが、2010年最初の涙をお届けします。

1975年、灼熱のバンコク。お金・美貌・愛に不自由なく暮らし、ただ“愛されること”を求め生きてきた香子は、ある日、バンコクに赴任してきたエリートビジネスマン・豊と出逢う。

だまも魅かれ合い、熱帯の夜に溺れていくふたり。

体も心も二つ目がふたりの距離を縮め、香子は人を“愛すること”こそが本当の愛だと気づく。

しかし豊は結婚を目前に控えており、日本に光子という婚約者がいた。

かわわが恋と大喧嘩しているから、それでも豊を愛し続けると決める香子は……。

そしてふたりは25年後のバンコクで、運命の再会をする――。

“人間は死ぬとき、愛されたことを思い出すのか、それとも愛したことを思い出すのか”

本作を貫くこの問いかけは、1975年から現代へと時代を移すと、さらに激しく観客の心に突き刺さる。ただ愛されることが幸せと想っていた香子は、豊と出会うことで愛することを知り、何があっても愛し続けることを決める。仕事への野望や野心を大事にするばかりに愛することに気づかない豊は、25年後、自分の本当の気持ちに気づかされる。夫となる人を愛し献身的に尽くし続ける光子は、情熱よりも強い理性で最後まで自分の愛を貫く。誰にもおとずれる、人生の岐路での究極の選択。観客は、香子、豊、光子の言葉や行動に過去の記憶や体験を呼び覚まされ、心を揺さぶられ、そのせつなさに感動を覚えていく。もう少し早く出会ってれば？もしあの時違う路を選んでいたら？あの一のことを伝えていたら？25年後に再会したふたりはいつたい？そして、最後に自分に問い掛ける。自分だったら、死ぬ前に愛されたことを思い出すのか、それとも愛したことを思い出すのか、と。

ラブストーリーの旗手イ・ジェハンのラブコールに応えた日本を代表する女優中山美穂は、岩井俊三監督『Love Letter』の大ヒットで、韓国でも愛されるトップスター。日本アカデミー賞優秀主演女優賞の『東京日和』以来12年ぶりの映画主演となる本作で、「彼女が演じた男を、まだ好きだと自分、演じている私が壊れてしまうのではないかなと思うときもありました」と、愛に強く生きる香子を体当たりで演じきる。そして、ふたりの恋の軌跡を美しく描き動かす、バンコクに赴任してきたエリートビジネスマン 豊を「ゼロの焦点」の西島秀俊、日本で豊のことを思い続ける上司の女性副社長「誰にも守ってくれない」の石田ゆり子が演じ、3人が作り出す男女の距離感が観客を瞬時に、25年という壮大な時間の中に引き摺りこんでいく。

25年という歳月をどのように映画化したら成功するだろう。完璧主義のイ・ジェハンは、英語、日本語、韓国語、タイ語の4ヶ国語が飛び交う国際プロジェクトに於いて徹底したこだわりを貫き、ラブストーリー映画では類を見ない、ドラマティックでスケール感ある映像を完成させた。エキゾチックで情熱的なタイのロケーションでは、黄金色の荘厳な王宮やチャオプラヤー川に加え、香子と豊の熱いロマンスを彩る舞台“マンダリン オリエンタル バンコク”をフィルムにおさめ、世界屈指のラグジュアリーホテルが約130年の歴史の中で初めて撮影を許可し、ホテルシーンでは100%、実際のオリエンタルホテルでの撮影が実現した。セクシーで挑発的な香子の魅力を表現する衣装は、全体の90%以上がオーダーメイド。1970年代のイメージで描かれた200枚以上のスケッチをもとに、シーンごとに香子の心情と生地質感や色合いをリンクさせた。さらに、時代の変化を多層的に表現するため、カメラ、照明、メイクなど細部にわたりこだわりを見せた。シューベルトやバッハをイメージしたという音楽では、観終わった後の余韻を何より大切に、悲しみと喜び、高級感と感情の共存を求めた。そして主題歌に中島美嘉を抜擢。映画の世界観やせつなさを音楽という別の側面で表現、ひととき大きな感動の波をエンディングに届けた。

かなわない恋だとわかったた





STORY



人間は死ぬとき、愛されたことを思い出すひとと 愛したことを思い出すひととにわかれる 私はきっと愛したことを思い出す

1975年タイ、バンコク。イースタンエアラインズの若きエリート、東垣内 豊(むかしはとうかつの)は、美しく貞淑な婚約者、青木光子(あおきみづほ)の存在に戸惑いを感じながらも、バンコク支社に赴任してきた。端整な容姿と優しい性格、遠大な野望まで持っている彼は、ここバンコクでも“青木”と噂され、上司の坂田の信頼厚く、本下ら同僚からも慕われ、日本人会の女性の人気も独占していた。仕事も恋愛もすべて順調、前途洋々の輝かしい青春を満喫していた豊。彼の婚約を仲間内で祝う酒宴に、その女は現れた。艶やかな美貌と息を飲むような官能的な魅力を漂わせた男たちの視線を釘づけにした青木光子の存在は、席に着くなりじっと豊を見つめた。

出会いから数日後、光子は予告もなしに豊のアパートを訪ねた。言葉も惜むように体を重ねるふたり。豊は自分を持つ光子の姿が欲求をとりながら、美しく奔放な光子の魅力に抗えなかった。そして、光子が住いとすオリエンタルホテルの“サマーセットモーニングスイート”で、ふたりの愛欲の日々が始まった。スイートルームに暮らし、高級レストランで食事をし、ブランド物を好きなだけ買う。豊と年の愛わらぬ若い女性か、なぜこんな賢明な暮らしができるのか？ どんな過去を経てここにいるのか？ 謎めいた光子は不思議な魅力を放ち、豊はただ惹かれていくばかりだった。



バンコクでの結婚式の準備のために決まって毎晩8時に電話をかけてくる光子が、ふと豊に尋ねる。「あなたは死ぬ前に、愛したことを思い出しますが、それとも愛されたことを思い出しますか。私は、愛したことを思い出します」。光子はただ豊だけを信じて待っている。だが光子との関係は断ち切るとすればするほど、光子への執着は募るばかりだ。初めは人目を忍んでいた逢瀬も、次第に大胆になっていく。水上マーケットで、繁華街で、デパートでのショッピングで、光子は堂々と腕をからめ、周りに見せびらかすようにふるまう。狭い日本人社会の中で噂が広がるのに時間はかからなかった。上司の忠告や同僚の苦言を背に受けながら、約束された未来と目の前の欲望との間で、豊の心は揺れ動く。そして光子は、そんな豊の恋についてふと告白を覚えていく。

豊と光子の結婚式の日は一瞬と迫っていった。出会ったときはただ欲望に流されていたふたりだったが、別れの日が近づくにつれ豊は冷静になっていく。後悔もなく別れられると思っていた豊は、ますます光子に惹かれていく自分を押さえられない。一方、今まで恋愛を遊びの立場に止めてきた光子も、豊に対する思いが本心であると、“愛すること”こそが本当の愛だと気づいていく。かなわない恋、それでも豊を愛し続けよう。豊の光子は、自分がバンコクを去ることを決める。光子が去る日、ふたりは空港で最後のキスを交わすのだった

25年後。豊はイースタンエアラインズの副社長に昇進していた。妻、光子との間には二人の息子がおり、まさにかつて思い描いていた通りの人生を送っている。そんなある日、豊は会社の将来を決める重要な商談でバンコクに出張することになった。宿酒はオリエンタルホテル。未だ未だ思い出を懐けるのロビーに足を踏み入れた豊の前に現れたのは、光子その人だった。光子はただ豊を待ち続け、VIP担当としてオリエンタルホテルにいたのである。25年の時間を超え、豊は初めて、自分がどれだけ深く光子を愛していたかに気付く。光子に会うために豊は再びバンコクを訪れるが、光子はすでに豊と会ったしなかった……。



「互いに想ってさえいれば、

いつか会えると信じていました。もう一度会えないのなら……」

Interview

私は、ただひたすらに彼らが愛おしいと思いました。

一人ひとりの観客を一輪の花だとし、大きなブーケをつくれたとしたら、すぐにも香子に届けたい思いです

■香子という女性を演じてみて

この物語は二人(豊、香子)の出会いによって始まりますが、私が演じさせていたということも、大きな出会いになりました。老人形であれ人であれ、出会っていくということには、計り知れない可能性が秘められていて、想像もつかない未来が訪れたり、自分を成長させてくれます。「いつか」のために「いま」が用意されている。そのことをこの作品を通してずっと考えていました。そして、そんなことをかみしめることが出来る作品でした。

人生の中で大きな出来事が起こるとき、それは必ずしも突然訪れる訳ではないように思います。きっと小さな準備軍としての出来事がいくつもあって、個人的で偏った考えかもしれませんが。

香子が、夢に向って真っ直ぐに生きようとする青年に魅かれたことは、一生の中にあるたくさんの出会いのなかのたったひとつ。彼に婚約者がいることや、別れを用意しなければならぬ現実はあるけれど、出会いを否定しないところが彼女の想いの深さなのだと思います。

忘れたことにしない、無かったことにしない、愛すること、愛したことを、全てを体当たりで受け止めて生きようとする彼女に、真の女性像を見たような気がしました。溢れすぎたり求めすぎたりする香子の感情は、120%のビューア心。彼女が泣いたり笑ったりするたびに、演じている私が壊れてしまっているのではないかと感じました。それはきっと誰かにとっては愛とは言えない範囲かもしれませんが。

人は必要以上に自分が傷付かないように、防衛本能を働かせて、気持ちを準備したり、未来を想像しながら上手く切り抜こうと思えば出来る力があるのかもしれない。ですが香子は、自分が傷付くことに恐れを抱くどころか、ただ、「愛した」のです。それを表現できるのが映画や小説の力なのだと思います。

私は、ただひたすらに彼らが愛おしいと思いました。

■イ・ジェハン監督との仕事について

繊細でシャイで高い意思を持つ監督は、彼自身が持つ全てのものを投げながら、この作品を作り上げました。アメリカ音痴ということで、独特のマイデンランディを余念面に打ち出しながら、彼の中のアジア的な精神がスタッフにも支持されていました。

監督とのコミュニケーションは、きちんと話し合う時は韓国語の通訳を通して、切羽詰った時や何気ない会話は英語でした。そのバランスが妙に楽しかったです。スタッフのほとんどが韓国の方で、平均年齢も日本の撮影現場に比べるととても若い。誰もが監督を信じて着いていく姿勢がとても印象的でした。

イ・ジェハン監督について強く思うこと。必ずまた一緒に作品を作りたい!もう二度と仕事をしたい!この両方です。こんな極端な思いをさせていたのは初めてです。また機会があれば縁があれば、なんていう社交辞令的な挨拶をまったくするつもりはありません。それほど監督もスタッフも私も、特別な時間を共に過ごしたのだと思います。笑ったり泣いたり怒ったり、励ましたり励まされたり。演じるということ以外にもたくさんの感情が溢れた現場でした。それだけにカメラが回っている時の集中力と緊張感がそれぞれ一体となった時、奇跡のような映像がフィルムに刻まれ、次なる奇跡を起こそうと同時に思ったのだと思います。

3年前、この作品が韓国の製作で行われると言うことで、シナリオを拝見させていただきました。どんな作品になるのか個人的に楽しみました。台詞の言い回しやキャストなど、自分なりに想像を膨らませていたり、観客として感動してみたいという希望があったり。その後、イ・ジェハン監督と会う機会があり、監督の偉うから出演して欲しいと直々にお願ひされました。私はその時、自分が演じることなどまったく考えてもいませんでした。個人の事情で長期間にわたる仕事は控えていた方がいたので、思いもよらぬこのお願いに戸惑いました。

その戸惑いから数分、どの気持ちがいちばん正直なものか?ずっと黙って考えていたと思います。かなり沈黙していたと思います。その中で見つけた答えが、香子を演じたいということでした。自分でも忘れていた、もしくは封印していた思いが甦ったのでした。

■タイでの撮影について

タイのロケ現場では韓国語、タイ語、英語が飛び交い、普段日本でどれだけ無意識に現場進行の状況を把握していたかが分かりました。日本では待ち時間を過ごしている際、スタッフの動きや会話や掛け声によって、自然に芝居やもろもろの準備が出来たりしますから。それがまったく言葉が分からない、現場作業の流れがつかめない、という初めての現場で、無意識に行動しないことが出来、とても新鮮に演じることが出来ました。とにかくスタッフの皆さんが、色々とお気遣い下さったり、言葉ではないコミュニケーションが温かく、その一つ一つに助けられました。

■12年ぶりの映画出演で、撮影を終えた気持ちは?

カメラの前に入ったとき、12年という月日を感じませんでした。撮影現場というのは私にとっていつも特別な空間だと思っています。それが今回のように国内制作のものでないにしても。私の分の撮影を終えた時は、全体のクランクアップではなかったが、クランクアップの知らせが届くまでは一緒に撮影している気分でした。その後の編集も、音の作業時も、まだまだ終わった気分にはありませんでした。そしてこうして公開の発表が出来る現在も、撮影時とあまり変わらない気持ちで。皆様に見ていただけて初めて、演じ終えた気持ちになれることを夢見ています。是非たくさんの方にご覧いただきたいです。

■映画を楽しみにしている方へのメッセージ

長い間お待ちいたしました。是非劇場でご覧になってください。

■中山美穂 プロフィール
1970年3月1日生まれ、85年6月21日レコードデビュー。第27回日本レコード大賞新人賞、第23回ゴールデンアロー賞受賞。同年、TBSドラマ「毎度おさわがせします」(85/168)に出演、一躍スターとなる。その後、7年連続のNHK紅白歌合戦出場、レコード大賞2回受賞、フジテレビ「月9」主演数年連続録「君の瞳に恋してる」(89)、主演女優として最多となるフジテレビ「月9」主演ドラマ7作品に出演。歌手として時代を代表する女性の地位を確立する。映画出演作には、新藤兼之監督作「ビーバップハイスクール」(86)、金子修介監督作「どっちにするの。」(89)、第81回日本アカデミー賞観衆賞を受賞した馬場孝夫監督作「彼の瞳だけが揺らめいて」(91)のほか、岩井俊二監督作「Love Letter」(95)では第38回ブルーリボン賞主演女優賞受賞、第20回朝日映画賞観衆女優賞などを受賞。竹中直人監督作「東京日和」(97)で第21回日本アカデミー賞優秀主演女優賞、第12回高崎映画祭優秀女優賞など、映画女優としても数々の賞に輝く。現在はパリ在中。09年にパリでの生活を綴ったフォトエッセー「なぜなら やさしいまちがあったから」(集英社)を発売。本作「サヨナライツカ」は、「東京日和」以来12年ぶりの映画主演、「ホーム&アウェイ」(02/OX)以来7年ぶりの女優活動となる。





「杏子、君は死ぬ間際に、

■西島秀俊 プロフィール

1971年3月29日生まれ。横浜国立大学在学中より活動をはじめ、TBSドラマ「あすなろ白書」(93/CX)等に出演。渡邊幸好監督作「居酒屋ゆうれい」(94)で映画デビューを果たす。99年に黒沢清監督作「コンゲン合戦」に主演。第9回日本映画プロフェッショナル大賞主演男優賞を受賞。02年に第59回ヴェネチア国際映画祭コンペティション部門に正式出品された北野武監督作「Dolls (ドールズ)」に主演。主な映画出演作に、利根川監督作「クロエ」(02)、中田秀夫監督作「ラストシーン」(02)、濱田徹監督作「世界の終わりとこの名の雄貴店」(01)、石川康監督作「tokyo.sora」(01)、紀里谷和明監督作「CASSHERN」(04)、井口泰昌監督作「大奥」(04)、黒田明彦監督作「カナリア」(05)、市川準監督作「トニー滝谷」(05/ナレーション)、大塚一幸監督作「メソッド・ヒミコ」(05)、石川康監督作「好きだ。」、黒沢清監督作「LOFT」(06)、林博史監督作「大奥」(06)、井筒和幸監督作「パッチギ! LOVE&PEACE」、池田千尋監督作「東南角部屋二階の女」(08)、門井彌生監督作「休戦」(08)、SABU監督作「蟹工船」(09)、大塚一幸監督作「ゼロの焦点」(09)などがある。



西島秀俊 Hidetoshi Nishijima

as

東垣内豊 Yutaka Higashigaito

9回裏、無難なバントよりはサヨナラホームランを一発飛ばすような衝動に溢れた29歳のエリートビジネススマン。バンコク支社に赴任した後、毎晩8時に日本にいる婚約者からの電話がかかってくる豊は、バンコクにある日本人会の女性の人気を独占し“若青年”と評されている。非の打ちどころがない婚約者、未来が保障された職場など、順風満帆の人生を送っていたが、熱感的で自由奔放な女、杏子に出会ったことで激しい恋に落ち、運命の岐路に立たされる。

誰かを愛したことを思い出す？ それとも愛されたことを思い出す？

Interview

自分の代表作になる作品です。映画に対する取り組み方も大きく変わりました。

自分の演技に、自分で見て驚ける結果が出たと思っています。

■原作、脚本を読んだときのイメージ、感想

出演が決まってから脚本を読み、その後原作を読みました。ものすごくスケールの大きな作品だと感じました。ラブストーリーは壮大で、時間的にも空間的にも広がりがあふれる映画だと感じました。

■役作りにあたって

東京で監督と会えた時は、豊がどのように生まれ育ち、生活をし、この先歩むであろう彼の人生について、徹底的に話し合いました。話し合いの中で役を固めていく作業は今までにない体験でした。実際の撮影現場では常に、監督がシーンの流れとそこにあるべき様々な感情を逐一演出してくれました。ただし監督が表したい感情は複数の気持ちを抱くことも重ね合わせていくもので、決して単純なものではありませんでした。肉体的アプローチとしては、年齢が上のパートから撮影し後に若いパートを撮影する予定だったので、25年後の豊を想定して体重を13キロ増やしました。ところが撮影の順番が変更になり急遽体重を落とすことになり、一ヶ月で15キロ近く落としました。ジムに通って身体を作りました。増量した幅の良い60代の豊のシーンはワンカットもないのが残念ですね。

■杏子と光子との間に揺れ動く豊の恋愛について

杏子とのラブシーンについては監督と、記憶に残るシーンにしよう話し合いました。ただのラブシーンではなく、最初は衝動的、突発的に意気込み、やがて肉体的恋愛から精神的恋愛変わっていく過程を、ひとつひとつ丁寧に撮っていききました。光子は結婚する妻として豊が本当にやりたいことをサポートしてくれる女性であり、どちらも豊にとって理想的な女性です。ですからものすごく心が揺れるのですね。

■監督について

完璧主義者で狂気の人。一方ユーモアもあり、貪欲でもある、本当に凄い人です。彼の貪欲さを物語るエピソードとして、特殊メイクをしたまま30時間撮影を続けたということがありました。特殊メイク担当者は連続10時間が限界というのですがお構いなし。僕自身、大丈夫と言いつつも最後には気絶しそうになりました。監督は退屈な状況でも決して妥協せず、撮影を続けるのです。でも彼自身は全て計算のうえで、この人はこれくらいやっても大丈夫とさっぱりと上眼を見切っているのです。肉体的には辛い部分もありましたが苦痛ではなく、むしろ楽しい体験でした。

■他のスタッフとの仕事について

映画を作ることに国の隔たりは無いと実感しました。深夜までテンション高く撮影を続け、その後みんなで飲みに行ってまた早朝から撮影ということも、韓国の人たちは平気です。そのうちスタッフとも仲良くなりました。タイ語、日本語、韓国語、英語が飛び交う現場では実際大変ではありましたが、スタッフのコミュニケーションは非常にうまくいきました。

■タイでの撮影について

ハードな気候やタイトなスケジュールで確かに大変でしたが、それ以上にタイでしか撮影できない絵がたくさん撮れました。ジャンボ機が停泊している橋をクラシックカーで爆走するシーンなどは、日本でも韓国でも絶対に撮れないシーンです。とてもワクワクしました。

■中山美穂さんとの共演について

初共演でしたが、存在が特別な人です。感性も中山さんしか持っていないものがたくさんあると思います。肉体的にも精神的にもギリギリまで追い込まれる過酷な現場で最後まで撮影に臨めたのは、中山さんの方だと思っています。少なくとも僕は、中山さんに支えられて撮影の全カットに集中でき、限界まで出し切れたと思います。中山さんと共演できたことは誇りです、感謝しています。

■石田ゆり子さんとの共演について

石田さんがタイに来てくれると、すごく落ち着きました。彼女の持つ癒やし力はどこか役柄と同じものがありました。テンションも肉体的にもギリギリのところに現れる石田さんは現場に安らぎを与えてくれて、大変助けられました。

■自身にとっての映画『サヨナライツカ』とは？

自分の代表作になる作品です。映画に対する取り組み方も大きく変わりました。自分の演技に、自分で見て驚ける結果が出たと思っています。ひとえに監督が先入観なく「何でも全部できる、お前は絶対できる、それを証明する」と僕にずっと言い続けてくれたことが一番大きかったと思います。監督に導かれ、自分の力を引き出してもらえました。これを機に、自分の中で様々な可能性が広がっていったら良いと思っています。



「豊さんが、

あなたに一度でも愛していると言ったことがありますか」

石田ゆり子 Yuriko Ishida

as

尋末光子 Mitsuko Tazusue

バンコクにいる婚約者との一日一回だけの電話を楽しみに、愛しているという言葉を忍耐強く待ち続けている。電話で話す時も手で口を隠しながら笑う、しとやかに美しい完璧な淑女。そんな光子は、落ち着いた表情と優しい言葉づかいの裏に、最後まで自分の愛を貫く強い力を持った女性である。

Interview

願わくば「愛し、愛されたこと」を思い出したいです。
でもきっと、愛したこと…を思い出すのではないのでしょうか？

■原作と脚本を読んだ時の光子のイメージ

どこか“武家の妻”のようだなと思いました。家を守り、夫に尽くす、強いひとです。

この物語の中で描かれる女性は（光子と光子）一見、両極端に見えますが、わたしは、二人で一人の女性を演じている気分でした。そもそも、女性とは光子の部分と光子の部分両方持っているのではないのでしょうか。合わせ鏡のように映し合うイメージをもって演じました。

■イ・ジェハン監督について

ロマンチストな少年。フランス人のような美意識。圧倒的な映像のセンス。ジョン（そう呼ばせて頂いておりました）の頭の中は一体どうなっているの？と思うことが数え切れない程あります。どんなにスケジュールがずれこんでも、日本の撮影チームでは考えられないようなハプニングに見舞われても、監督は現場では少年の笑顔、その笑顔と情熱に救われたと思います。「監督」ですが、どちらかというと一人の「アーティスト」「表現者」ですね。

■中山美穂さんとの共演について

女の私から見てもぞくぞくするような美しさと可愛らしさを持った方です。同い年なのに美穂ちゃんはずっと大人。彼女の強さと優しさに、私は本当に支えられました。一緒にシーンが数シーンしかないのはちょっと残念でした。光子が光子の前でははらはらと涙を流すシーンでは、私は内心守ってあげたいっ！！…を思っていました。本当に魅力的な方です。美穂ちゃん。

■西島秀俊さんとの共演について

西島さんは本当に根っからの映画人だと思います。西島さんとは、役を通してしか会話をしなかったように感じます(笑)。豊は光子に冷たい(?)ので私は結婚放棄かったです！！西島さんは現場でも積極的にスタッフのコミュニケーションをとり、英語も、時には韓国語もお話していました。どんなに大変でも、いやな顔ひとつしない、尊敬に値する方です。すばらしいと思います。

■撮影について

言葉に出来ない程いろいろ大変でした。外国のスタッフと母国語の映画を創るということの大変さも、もちろん文化の違いも、感覚の違いも、スタッフの方々は一ひとりと本当に優秀。現場で本当に必要なのはなんといっても“忍耐”そして“情熱”。そんな現場でした。ととてもとても語りつくせません。とにかく刺激的というかなんと言おうか…。でも撮影終えた今、残っている気持ちは感謝しかありません。皆さん本当にありがとうございました。

■石田ゆり子 プロフィール

1969年10月3日生まれ。88年、TVドラマ「海の野馬」(NHK)で女優デビュー。以後、「101回目のプロポーズ」(91/CX)、「不連続な美実」(97/TBS)、「永遠の仔」(00/NTV)、「オヤジい。」(00/TBS)、「できちゃった結婚」(01/CX)、「丸で金いしょう」(02/EX)、「Dr.コトー診療所」(03/CX)、「がんばっていきまっしょい」(05/EX)、「今週、妻が浮気します」(07/EX)、「はだしのゲン」(07/EX)、「古畑中学生」(08/EX)、「魔女裁判」(09/EX)など数々のドラマに出演。映画出演作には、森田芳光監督作「悲しい色やねん」(88)、宮崎駿監督作「もののけ姫」(97/アニメーション、声優)、滝田洋二郎監督作「秘密」(99)、島田明彦監督作「奥娘がえり」(03)、横村一路監督作「解夏」(04)、行定勲監督作「北の零年」(05/第29回日本アカデミー賞優秀助演女優賞受賞)、佐々部清監督作「四日間の奇蹟」(05)、朝原雄三監督作「99/バカ日誌 17」(06)、小松隆志監督作「幸福な食卓」(07)、岩間良一監督作「誰も守ってくれない」(09)、岩本仁志監督作「MW -ムウ-」(09)など話題作への出演を続ける。公開待機作品に、山田洋次監督作「おとうと」がある。





「賢い男は道には迷わないものだ」

CAST PROFILE



「この女は違う。まるで女神だよ。言葉では表現できない。あの女が通ると、みんな息が詰まってぶっ倒れちゃう。」

加藤雅也 Masaya Kato
as
桜田善次郎 Zenjirou Sakurada

1963年4月27日生まれ。ファッション誌やパリ・コレモデルを経て、88年にすぎきゅんいち監督作「マリリンに逢いたい」の主演で映画デビュー。以後、五社英雄監督作「226」(89)、門奈克雄監督作「マドンナのごとく」(90)など多数の映画に出演。90年に渡米し、ハリウッドでの実績を積み、活動拠点をアメリカに移す。その後、北野武監督作「BROTHER」(01)、主役を演じた三池崇史監督作「亮ぶる魂たち」(02)、「許されざる者」(03)などやくざやマフィアを描いた作品で評価を得る。TVドラマでは「ナオミ」(99/CX)、「利家とまつ〜加賀百万石物語〜」(02/NHK)、「anego」(05/NTV)、「さらさら研修医」(07/TBS)、「アンフェア」(06/CX)などに出演。その他の主な映画出演作に、鎌原哲雄監督作「死者の学園祭」(00)、北村龍平監督作「亮紙」(03)、平山秀幸監督作「魔界転生」(03)、小林義則監督作「アンフェア the movie」(07)、横野博監督作「未来予想図〜アイ・シ・テルのサイン〜」(07)等がある。

マギー Magi
as
木下恒久 Tsunehisa Kinoshita

1972年5月12日生まれ。兵庫県出身。92年にお笑い集団「ジョビョバ」を結成。02年12月の休止までリーダー、構成、演出を務めた。脚本家として、鈴木雅之監督作「NINXNIN 忍者ハットリくん THE MOVIE」(04)、TVドラマ「ブスの腹に恋してる」(06/CX)、「山田太郎ものがたり」(07/TBS)などで活躍。07年に放送作家・福田雄一とのユニット、U-1グランプリを旗揚げ。さらに、ワンシチュエーションコント集「取調室」にて「舞台でのコント」を5年ぶりにスタートさせ、俳優として舞台、TV、映画と活躍の幅を広げる。主な映画出演作に山崎貴監督作「ALWAYS 三丁目の夕日」(05)、「ALWAYS 続・三丁目の夕日」(07)、中島哲也監督作「練われ松子の一生」(06)、金子修介監督作「デスノート the Last name」(07)、原田眞人監督作「船越の恋」(07)、「クワイマーズ・ハイ」(08)、福澤英雄監督作「私は貝になりたい」(08)など話題作に多数出演している。

1975年

人物 相 関 図

イースタンエアラインズ



桜田善次郎(加藤雅也)



木下恒久(マギー)



ステイブ
(スバロン・ギッスワーン)



山田夫人(川島なお美)

Bangkok
バンコク



東垣内 豊(西島秀俊)



安西順子(松原智恵子) 安西康道(須水 慶)



オリエンタルホテル支配人
ジャルワット



真中香子(中山美穂)

Tokyo
東京



尋末光子(石田ゆり子)

25年後

Tokyo
東京
東垣内家



長男:東垣内 尊(日高亮彦)



次男:東垣内 剛(西島隆弘)

息子たち

恋に落ちる

婚約

叔父・叔母

上司

同僚

友人



「サヨナライツカ」

いつも人はサヨナラを用意して生きなければならない
孤独はもっとも裏切ることのない友人の一人だと思うほうがよい
愛に怯える前に、傘を買っておく必要がある
どんなに愛されても幸福を信じてはならない
どんなに愛しても決して愛しすぎてはならない
愛なんか季節のようなもの
ただ巡って人生を彩りあきさせないだけのもの
愛なんて口にした瞬間、消えてしまう氷のカケラ

サヨナライツカ

永遠の幸福なんてないように
永遠の不幸もない
いつかサヨナラがやってきて、いつかコンニチワがやってくる
人間は死ぬとき、愛されたことを思い出すヒトと
愛したことを思い出すヒトとにわかれる
私はきっと愛したことを思い出す



■イ・ジェハン プロフィール

1971年、ソウル生まれ。12歳でアメリカに渡り、様々な文化や人種の影響を受けて育つ。15歳から短編映画を作り始め、ニューヨーク大学で映画を専攻。短編映画を40本作り制作する。98年、自ら脚本も担当し、ニューヨークに住むアジア系移民の孤独や挫折、そしてアメリカの多層社会や小教団意識が生きていく暮らしを描いた『The Cut Room Deep』(原)で長編監督デビュー。ミュージックビデオの演出も数多く手がけており、『BoA』『D. Peace』(原)、『リナ・バーバ』(You Mean Everything To Me) (原)などがある。04年、長編映画を制作して、『ジョン・ラソンとジョン・ジャン』主演のラズベリー『私の頭の中の消しゴム』の脚本・監督を手掛け、観客が2億2千万人を超える記録、社会現象を引き起こす。翌05年の日本公開でも、歴代韓国映画の興行収入1位となる興行収入30億の大ヒットを記録。日本映画界を驚かせ、2006年の映画祭で『サヨナライツカ』に選ばれる映画祭に賞状。さらに深くドラマチックになったラズベリーを賞賛された。2007年としてアクション映画を手定めている。



監督・脚本：イ・ジェハン John H. Lee

Interview

■原作『サヨナライツカ』との出会いについて

『私の頭の中の消しゴム』の成功の後、韓国語に翻訳された原作と出会いました。読み終えるや否や、すぐに作業に取り掛かりました。映画化する際は、主人公の告白を展開する形式は変える必要がありました。登場する詩など秘められたテーマは胸に迫るものがありました。“岐路”という単語が印象深く、原作的な見せ場を政治的ビジュアルのいくつか、即座に頭に浮かびました。

■キャストについて

韓国人俳優で、韓国語で作るという選択もありましたが、小説が持つ歴史的、社会的な背景や登場人物のアイデンティティや葛藤を描写するためには、日本の俳優で日本語をベースに作るべきだと思いました。

音子役の中山美穂さんについては、『Love Letter』で国際的に知名度もあり、好印象を持っていました。脚本の初稿を読んでいただいた、非常に繊細な方という印象を示してくれた時はとても嬉しかったです。お会いして、感受性が豊かで非常に繊細な方だと感じました。豊については、好青年というキャラクターのイメージが容易ではありませんでした。アイドルではなく演技派を求めていました。豊は、表面きは温和で親近感がありながら心の中は燃えている。豊役になった西島さんは、直感で即決しましたが、彼との出会いは幸運でした。そして光子役ですが、この役はどうしても石田ゆり子さんに演じてもらいたいと思い、私が指名しました。豊を苦しめている時から石田ゆり子さんを念頭に置いていました。私の大好きな女優さんです。

■タイでの撮影について

オリエンタルホテルとの撮影交渉が一番のハードルでした。130年以上の歴史を持つ世界最高のホテルであり、撮影を全面的に許可したことをお礼でなかったからです。撮影許可をとりつけた後も、スケジュールはタイトでしたが、様々な角度からホテルの美しい内部を映像に収めることができました。ロケーションではタイのロケーションを表現したかったので、デートシーンも観光スポットではなく市場など、日常の中にも特別なショットを追求しました。“岐路”をドラマチックで表現するための道を探ることには苦心しました。格納庫など飛行場関連のシーンの撮影には、タイ航空の協力が大きかったです。

■演出について

俳優には主にシーンの意味、前後のシーンのつながりについて説明し、表面に見えるものと内面に感じるものの衝突を表現してほしいと言いました。撮影の前では、中山美穂さんからも感情を準備するために多くの質問を受けました。俳優との信頼が積み重ねるほど、目を見ただけで何が言いたいかわかるようになっていくので、言葉の限界を克服するためにも、翻訳できない言葉は避け、ストレートな表現を目指しました。

■撮影で一番楽しかったことは？

国際的な企画であることと、70%を占めるタイでの撮影です。主要スタッフは韓国人でしたが言語関連(録音、スクリプター、俳優関連)は韓国語と日本語のバイリンガル、または日本語を主に使用するスタッフを配しました。現地スタッフも入り、常に4ヶ国語(タイ語、日本語、韓国語、英語)が飛び交っていました。コミュニケーションを取る時、急を要する状況で正確な伝達が難しかったのは少し困難でした。

■音楽のイメージについて

映画音楽は常に重要です。シナリオを書きながら数曲、選びました。あるシーンはクラシック、別のシーンではジャズ、70年代はボサノヴァ、音楽のフュージョンなど。そんな音楽をたくさん聴いてもらったんです。作曲に際してはシューベルトやパッハのような微妙な感情を漂わせる音楽を望みました。悲しみを表わすことができる音楽、高級感と品格のある感情を描写できる音楽。観終わった時に余韻の残る音楽を作りたいかったです。音楽にはとても満足しています。ひととき大きな感動が押し寄せると思います。

■1970年代のシーンと現在のシーンの撮影について

空間的な対比より時代の対比を重要視しました。若い頃と中年の頃を、各々赤と青のフィルターを使い、色のベースを分けて撮影しました。若い頃の直気、年を重ねた後の冷たさや空虚感などを色合いや質感でも表現しました。照明や構図でも、若い頃はタイトに、年を重ねた後は広い構図で空虚感を表現しました。レンズの選択、メイクなど、多層的に時代の変化を表現しようとした。

■衣装について

音子はミステリアスな魅力を持つヒロインです。前半は危険なファムファクトールのように見えますが、後半は違った姿に変化するの、メイクや衣装が大きなポイントになります。音子は時代を超えた女性なので、70年代の流行に捕われないことを望みました。ファムファクトールの衣装だけでなく、イングリッド・バーグマンのような“ハリウッド・ドラマ”のイメージなど、多面性と変化を見せたかったです。

■大成功した『私の頭の中の消しゴム』の次作ということでプレッシャーはありませんでしたか？

監督という職業は、プレッシャーが付きものです。失敗に対する恐怖もありますが、同時に成功への希望もあります。一番のプレッシャーは、自分が『私の頭の中の消しゴム』のような映画を期待しているかもしれないという心配です。『私の頭の中の消しゴム』で日本の観客に共感してもらえましたが、本作はまったく別の物語であり、別の感動がある作品です。観客がどんな反応を見せてくれるかは、気になることです。

■映画『サヨナライツカ』とは？

生きていくうえで、私たちは別れを避けられません。いつも心の中に別れを準備しながら生きなければならない、人間の悲しみを語る映画です。人生は選択の連続、若い頃の選択が、年を重ねた後、本当に正しい選択だったと思えるのかを問いかける、そんな映画です。

About costumes

200枚以上のスケッチ。90%以上の衣装が、“脊子”のために作られた

セクシーで神秘的な脊子の神秘的な魅力表現するためには、1970年代のイメージを基本に、時代を超えて洗練されたクラシカルな衣装が必要だった。イ・ジェハン監督の前作「私の頭の中の消しゴム」でも衣装を担当したキム・ソニルは、完璧主義の監督の要望に見事に応えた。200枚以上のスケッチを経て、全体の衣装の90%以上を中山装束のために特別にデザインし、仕立てた。オリエンタルホテルのスイートルームの住人にふさわしい、ゴージャスで気品あふれる衣装の数々。デザインのみならず、生地質感や色合いがシーンごとに脊子の心情とリンクしていく。

中でも最も印象的な衣装は、白いウエディングドレスだろう。イ・ジェハン監督が求めたのは、一人で着たり脱いだりするの不可能なほど長くゆったりとしたデザイン。ロマンティックの集大成とも言えるこのウエディングドレスは、すべての女性のファンタジーの象徴でもある。



原 作

原作者：辻仁成 Hitonari Tsuji

東京都生まれ。89年「ピアノシモ」で第13回すばる文学賞を受賞。以後、作家、詩人、音楽家、映画監督と、幅広いジャンルで活躍。97年「海峽の光」で第116回芥川賞。99年「白仏」のフランス語訳本「ル・ブダグ・プラン」でフランスの五大文学賞の一つである仏フェミナ賞・外国小説賞を日本人として初めて受賞。2003年、渡仏。小説、詩集、エッセイ集、写真集など、著書多数。現在はロックバンド「ZAMZ A」のヴォーカリストとしても活動中。

辻仁成
イツカ
サヨナラ

原作：「サヨナライツカ」辻仁成(初巻)文庫

主 題 歌



「今回、このような素晴らしい作品の主題歌に選んで頂きとても嬉しく思っています。切ないシーンにも合う楽曲に仕上がっていますので、是非映画と共に音楽も楽しんで頂けたら嬉しいです。」

中島美嘉 Mika Nakashima

1983年生まれ。01年、TVドラマ「傷だらけのラブソング」(KTV)のヒロインに抜擢され、同時に主題歌「STARS」で歌手デビュー。新人としては異例の60万枚を超える大ヒットを記録。そして02年、第16回ゴールドディスク大賞新人賞、第35回ALL JAPAN リクエストアワード最優秀新人賞、第35回日本有線大賞最優秀新人賞、第44回日本レコード大賞最優秀新人賞受賞など、数々の賞を受賞、一躍大スターとなる。以来、リリースする曲が軒並みビッグセールスを記録するミリオンシンガーにして、常にポップ・フォーマットの新たな可能性を提示し続けているカリスマヴォーカリストの地位を確たるものに。05年には大谷健太郎監督作「NANA」に大崎ナナ役として主演。さらには主題歌「GLAMOROUS SKY」をNANA starring MIKANAKASHIMA としてリリース。さらに06年にも「NANA2」主演及び主題歌「一色(ひといろ)」をNANA starring MIKA NAKASHIMA としてリリースなど、俳優業としてもアーティスト性を発揮。その活躍のフィールドは日本に留まらず、アジアから世界へと広がっている。

映画「サヨナライツカ」の主題歌「ALWAYS」は、TVドラマ「流星の絆」(08/TBS)挿入歌として話題をさらったヒット曲「ORION」を紡いだ百田留衣のペンによるもの。「キミが笑うだけで、明日が見える。例え過ちだとしてもかまわない。今はただ…」と命を賭すように言葉をつないだ歌は、その歌いだしを聴くだけで、聴く者の心を奪い取る愛のパラードである。
www.mikanakashima.com

主題歌 中島美嘉 「ALWAYS」

<作詞・作曲：百田留衣 編曲：百田留衣>

数え切れない程にただ
キミを想い浮かべた
部屋を打す明かりがそっと
キミの面影を探す

何もかもが今
色褪せて見えるこの世界に
確かなものは何もないけど
信じていたい キミとなら

例えばキミが笑うだけで
明日が見える気がした
例えば誰か傷ついても
迷わず駆け出して
今すぐ会いにいこう きっと

肩に触れる手のぬくもり
今でもまだ愛しい
とめどなく流れる雫に
息を溜め寄り添った

愛は季節のように
移ろいゆくもの それでもいい
明日のことは分からないけど
信じていたい キミとなら

「サヨナラ」キミは忘れるかな
永遠をみた夜さえ
変わらぬ君と笑えるかな
どこかでいつかキミを失う
その時までずっと

二人だけの日々が
過ちだとしても
かまわないから ただ

「サヨナラ」キミは忘れるかな
永遠をみた夜さえ
変わらぬ君と笑えるかな

どこかでいつかキミを失う時まで

例えばキミが笑うだけで
明日が見える気がした
例えば誰か傷ついても
迷わず駆け出して
今すぐ会いにいこう きっと

Production Note



『私の頭の中の消しゴム』イ・ジェハン監督×12年ぶりの映画主演・中山美穂
日本と韓国を代表する才能が、せつなくも美しい愛を描き出す

韓国では「アンニョン、オンジェンが(きよなら、いつか)」というタイトルで出版された原作『サヨナライツカ』は、男女の人生における愛と選択、人生に対する深い問いかけを含んでいる。原作を読みながら、アメリカの詩人ロバート・フロストの詩『行かなかった道』(The road not taken)とともに果てなく広がる岐路のイメージを思い浮かべたというイ・ジェハン監督は、一気にシナリオを書き上げた。『私の頭の中の消しゴム』で観客の琴線に触れたイ・ジェハン監督の視点と感性を通して、一人称の視点で独白のように書かれた小説とは異なる映画という新しい領域で、『サヨナライツカ』は深くせつないラプストリーとして完成した。

『貴は人生でいくつもの岐路を渡る。この映画を通して目標、夢、置かれている状況について考えられたいと思う』と語るイ・ジェハン監督が最も力を入れたシーンの1つが、“25年の歳月を写し映”を表す瞬間だ。ワンカットの中で、青年だった貴が中年の貴にジャンプする瞬間に感じられる圧倒的な人生の重みは、映画の後半の物語にドラマティックな緊張感を与える。また監督は、香子と貴が結ばれるオリエンタルホテルの“サマーセットモームスイート”の名前を聞いた瞬間、サマーセット・モームの「幸福など存在しない。私たちはただ努力するのみだ」という一節に深く感銘を受けた学生時代を思い起こした。長い歳月が流れた後、映画の内容と絶妙に絡み合う一節と再会し、自分との深い縁を改めて感じたのだ。

イ・ジェハン監督の新たなミュージスは、中山美穂。岩井俊二監督の『ラブレター』で韓国でも愛されてきた中山美穂は、『私の頭の中の消しゴム』を見て感動し、イ・ジェハン監督の映画に出演することを決めた。『東京日和』以来12年ぶりの映画主演となった本作で、さらに深みが増したまなざしと演技力がイ・ジェハン監督の演出と出会い、中山美穂は強烈な魅力を持った官能的な女性に変身した。イ・ジェハン監督は“女性らしく、しとやかな第一印象”だった彼女が、撮影現場では一転、はっとするほどの魅力を運び、”好青年”貴を惹かず熱演に感嘆を禁じえなかったという。イ・ジェハン監督の言葉どおり、”胸で計算した演技ではなく、繊細な感性で演技する女優”中山美穂の果敢で情熱的な変身に、観客は感嘆するだろう。

”好青年”貴は、温かな笑顔で愛されてきた西島秀俊のほまり役だった。最初に会うことになった西島秀俊との打ち合わせの後、イ・ジェハン監督はその場でキャスティングを確立した。香子と出会い、自分が”好青年”ではなかったことを悟る貴。端正な外見とは異なり、内面に炎を秘めている貴は西島秀俊のものだったからである。これまで、さまざまなジャンルの作品で幅広い役をこなしてきたベテラン俳優らしく、両極端な二面性を持つ貴のキャラクターをダイナミックな演技で見事に表現した彼は、本作で“ラプストリー”の真価を見せる。

石田ゆり子の写真を1枚見ただけでイ・ジェハン監督は“光子は彼女だ!”と確信を持った。監督からのラプコールを受けた石田ゆり子は、情熱よりも強い理性で最後まで自分の愛を貫く強靱な女性キャラクターを熱演して応えた。常に静かに敵船の如く“光子”のせつないまなざしと内面、秘められた深い恋しみが感じられる演技は、愛を貫こうとする人たちの共感を呼ぶだろう。

韓国の出資・演出×日本の原作・俳優×3ヶ国のスタッフ参加
韓国が主導するグローバル・プロジェクトの新しいモデルを示す

韓流ブーム後、韓国では映画作品の輸出と俳優の海外進出が活発になったが、『サヨナライツカ』は新たなグローバル・プロジェクトの時代を開く製作モデルとなる作品である。韓国でのエンタテインメントが輸出、製作し、イ・ジェハン監督が日本の小説を原作に脚本と演出を手掛け、主役を演じるのはいずれも日本のトップスター。韓国の製作陣がタイと日本で現地のスタッフを起用して撮影し、現場では日本語、韓国語、タイ語、英語の4ヶ国語が飛び交った。当初から韓国だけでなく、日本、アジア、そして海外マーケットまでも視野に入れた企画された本作は、“合作映画”の枠では収まらない野心的なプロジェクトとして、より広い舞台に向かって急速な進化を遂げている韓国映画の先頭走者となるだろう。

異国的な魅力あふれるタイの絶景が
スクリーンに広がる

赤く燃える太陽、黄金色の荘厳な王宮、庭園の向こうに見えるチャオプラヤー川……。タイは、すべてを魅了しつくすほど熱いロマンスの最高の舞台だった。製作陣が韓国、現地をロケハンし、長い準備の末にスクリーンに描いたタイの絶景は、今まで見たことのないほどエキゾチックで情熱的な映像となって、観客の目を驚かせてくれるに違いない。

ロケ MAP



1年にわたるタイ、日本、韓国、3ヶ国のロケーションが、時間と空間を超えたスケールで視線を圧倒する

タイと日本で25年という歳月の変化を完璧にカメラに収めなければならなかった製作陣。1970年代のタイの街を再現するために看板1つ、衣装1着に至るまですべて制作し、日本でも古い家屋を探して1970年代の情報をそのまま活かした。熱帯の変わりやすい天気と戦いながら2度にわたるタイでの撮影を終えた後、製作チームはセット撮影のために再び韓国行き飛行機に乗らなければならなかった。1年近い時間、3ヶ国を飛び回る強行軍の末、ラプストリー映画では類を見ないスケールとドラマティックさを兼ね備えた映像を完成させることができた。

130年の歴史を持つバンコクのオリエンタルホテル、そのドアが初めて開けられる

バンコク心臓、チャオプラヤー川沿いに位置するオリエンタルホテルは約130年間、王族や国賓はもとより、ジョセフ・コンラッドやサマーセット・モームなど文豪の行きつけのホテルとしても名高い“タイの誇り”である。原作小説にも実名で登場し、映画の中でも香子と貴の愛を象徴する空間となる。ホテル側との交渉のために、製作陣は“ミッション・インポッシブル”に挑戦した。そしてシナリオを丁寧に検討したホテル側は、驚いたことに約130年の歴史の中で初めて、ホテル内での撮影を許可した。作品のテーマや深み、また劇中のオリエンタルホテルが“他のホテルを代用するのは不可能”な場所だという点に共感したホテル側が、ロビー、客室、レストラン、廊下、庭園などホテル内のすべての空間を解放してくれたため、最終的に映画の中のホテルのシーンは100%、実際のオリエンタルホテルで撮影することができた。現場では3ヶ国の撮影スタッフが正装して撮影に臨むという珍風景が見られたが、それはスタッフもホテルの宿泊客に配慮し、厳格なオリエンタルホテルのドレスコードに従ったためだった。



Directed by John H. Lee
 Executive Producer Katharine Kim
 Co-Executive Producers Joon H. Choi
 Sean Lee
 Produced by Jea S. Shim
 Young S. Hwang
 Associate Producer & Casting Takahiro Kasagi (kansai TV)
 Co-Producer Jong-Yoon Roh
 Music by Jae-hyuk Seo
 Costume Designer Seong-il Kim
 Edited by Steve M. Choe
 Production Designer Ki Ho Choi
 Director of Photography Cheon Seok Kim
 Screenplay by John H. Lee
 Shinho Lee
 Man-hee Lee
 Based on the Novel by Hironari Tsuji
 Visual Effects Supervisor Tae-hun "Iro" Kim

監督 イ・ジェハン
 製作総指揮 キョサリン・キム
 共同製作総指揮 チェ・ジュスファン
 イ・サンヨン
 プロデューサー シム・ジェソプ
 ファン・ヨンサン
 アソシエイト・プロデューサー&
 キャスティング 宮藤 浩弘 (関西テレビ)
 共同プロデューサー ノ・ジョンユン
 音楽 ソ・ジェヒョク
 衣裳 キム・ソンイホ
 編集 チェ・ミニョン
 美術 チェ・ギホ
 撮影 キム・チョンソク
 脚本 イ・ジェハン
 イ・シノ
 イ・マニ
 原作 辻 仁成
 視覚効果 キム・テファン

Toko Manaka MIHO NAKAYAMA
 Yutaka Higashigaito HIDETOSHI NISHIJIMA
 Mitsuko Tazusue YURIKO ISHIDA
 Zenjiro Sakurada MASAYA KATO
 Tsunehisa Kinoshita MAGY
 Suthep SUPAKORN "TOK" KITSUWON
 Mrs. Yamada NAOMI KAWASHIMA
 Junko Anzai CHIEKO MATSUBARA
 Yasumichi Anzai KEI SUNAGA
 Takeshi Higashigaito MITSUHIRO HIDAKA
 Tsuyoshi Higashigaito TAKAHIRO NISHIJIMA

真中 音子 中山 美穂
 東里内 豊 西島 秀俊
 尋末 光子 石田 ゆり子
 桜田 善次郎 加藤 雅也
 木下 恒久 マギー
 ステイブ スパコン・ギッスワーン
 山田 夫人 川島 なお美
 安西 順子 松原 智恵子
 安西 康道 須永 慶
 東里内 健 日高 光啓
 東里内 剛 西島 隆弘

サヨナライツカ

SAYONARA ITSUKA

監督・脚本：イ・ジェハン
 中山美穂 西島秀俊 石田ゆり子 加藤雅也 マギー

原作：「サヨナライツカ」辻 仁成 (白水文庫) 主題歌：「ALWAYS」中島美嘉 (ソニー・ミュージックアソシエイテッドレコーズ)
© エンタテインメント 提供/制作：スパイロフィルム
 2009年 韓国/台湾/2時間14分/スコープサイズ/ドルビーデジタル
 韓国でソナレビジョン、アジア・ニュース エンタテインメント、韓国テレビ放送、ソニー・ミュージックエンタテインメント
 配給：アスミック・エース
 ©2009 CJ Entertainment Co. All Rights Reserved.

sayo-itsu.com

R15+



sayo-itsu.com

2010.1.23 (Sat.) ROADSHOW

